

看護・作業療法・社会福祉学科学生の連携に関する認識 —連携力養成のための合同演習—

難波悦子 吉田 薫* 横山奈緒枝*

Cognitions of occupational therapy, nursing, and social welfare students after completing a training program to developing cooperation

Etsuko NAMBA, Kaoru YOSHIDA*, Naoe YOKOYAMA*

要 旨

【研究目的】医療・福祉領域では、対象者主体の包括的ケアのために、専門職者の連携が欠かせない。看護・作業療法・社会福祉の3養成課程を持つA大学において、協働のための連携力を高める目的で、「講義、連携スキルトレーニング、グループ討論」から成る連携力養成プログラムを実施した。討論の記録から、学生が持つに至った連携への認識を分析し、先に調査した現場の専門職者における認識（吉田ら、2009）との異同を検討し、学生を対象とした模擬的学習の効果と限界を考察する。

【方法】参加者：三学科の学生40名。手続き：連携に関する基本の講義を受け、老人保健施設を想定した連携をロールプレイによって学習した後、6グループに別れて討論。テーマは「他職種と連携する時、どうすればうまくできるか、どんなことが必要か」。分析：KJ法。

【結果】学生の認識には、専門性の理解、情報、信頼関係、利用者中心、カンファレンス、役割、チームワーク、伝え方、共通言語、共通の目標の10カテゴリが抽出された。

【考察】学生は、きちんと話し合いの場を設けて、共通の目標を作り、それぞれの役割を見定めることをもって連携ができると受け止めた。しかし施設職員では、公的な話し合いの場で簡潔な連絡・調整を行い、非公式の場で細かい相談をする二重構造を持ち、自職種の目標設定時にすでに目標の共通化が図られており、専門性に拘らない柔軟な役割分担を実施していることが示唆されている。セッションは基本要素の獲得をもたらすが、実践現場では実情に合わせた臨機応変さが、連携の「滑らか感」を保証している。いわば道具面から運用面への展開を、実習などの現実場面を活用して果たすことが課題と考えられる。

キーワード：連携スキル、シチュエーションロールプレイ、看護・作業療法・社会福祉学科

Key words: cooperation skills, situation role-playing, department of occupational therapy, nursing, social welfare

はじめに

1989年、政府は高齢者人口の増大に対し高齢者の保健医療福祉制度の整備を行うとともに様々な保健医療福祉サービスの提供がなされるよう人員配置計

画を策定した。その後、それらサービスを提供する側の人員である医療福祉専門職の養成が目下の急務として全国的規模で展開されていった。当大学もこの流れの中に位置している。

吉備国際大学保健科学部作業療法学科
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8
*吉備国際大学社会福祉学部社会福祉学科
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8

Department of Occupational Therapy, school of Health Science, KIBI International University 8, Iga-machi, Takahashi-City, Okayama, Japan, 716-8508
*Department of Social Welfare, School of Social Welfare, KIBI International University 8, Iga-machi, Takahashi-City, Okayama, Japan, 716-8508

当大学は社会学部のみ単科大学であったが、1995年に保健科学部、社会福祉学部が設置され、医療・福祉の専門職養成課程が開設された。しかしながら、これまで学科間の交流はほとんどなく、学科単位での専門職養成が進んできた。つまり、同じ大学に所属しながら教員、学生ともに他学科の養成システムについての知識はほとんど持たず、自学科の養成教育のみに関心が向けられていた。しかし世の趨勢から他大学においては、いち早く医療系・福祉系学科の連携教育が開始された。その中でも新潟医療福祉大学¹⁾においては2001年から医療技術学部と社会福祉学部の癒合をはかり、1年次から連携教育が開始され、その後全学年において実施される連携教育に進化している。また、埼玉県立大学²⁾では、2003年から看護学科、理学療法学科、作業療法学科、社会福祉学科が中心となり、いち早く連携教育に取り組んできた。そして、当大学においても平成20年度(2008年)文部科学省「質の高い教育プログラム」の選定を受け、保健科学部、社会福祉学部合同の「連携力養成プログラム」を開始した。

当大学では、この取組以前に、3年間にわたる「高齢者福祉の場における対人援助技能習得プログラムの開発」の研究を行っている。それは「看護・作業療法・社会福祉の専門職養成における実習システムに関する研究」³⁾、「看護師・作業療法士・社会福祉士の資格取得における制度と課題に関する研究」⁴⁾、「対人関係形成能力およびコミュニケーション力に関する研究」^{5,6)}の3つの研究からの成果である。これらから「看護・作業療法・社会福祉専門職の関わりスキル-12の共通基本スキル-」を作成し、各々の学科において高齢者への対応の仕方を学ぶためのロールプレイによる実践を行ってきた。その結果、使用可能で有用なプログラムとの感触を得た。そこでこの学科ごとの「関わりスキル」演習の上級編として保健・医療・福祉専門職の「連携力養成プログラム」を考案した。このプログラムは、看護師、作業療法士、社会福祉士の資格を持ち、老人保健施設での高齢者の生活の様子や行動に詳しい4名の教員が作成した7つの事例とシチュエーションで構成されており、シチュエーションロールプレ

イと称している。内容は、施設入所の高齢者にまず専門職の一人が声かけして、情報収集する。次に場面を変えて、得た情報を他職種に伝え、協働・連携をしていくというものである。老人保健施設を選択したのは各医療・福祉の専門職が共通して所属していることが多いことによる。

この「連携力養成プログラム」は、「連携に関する講義」、「ロールプレイを用いたスキルトレーニング」、「グループ討論」から成っており、ここでは、この演習最後のセッションにおけるグループ討論の記録から、学生が持つに至った連携に関する認識を分析する。そしてその前年に調査した現場の専門職者における連携に関する認識との異同を検討し、学生を対象とした模擬的学習の効果と限界について考察する。

体験型合同演習とは

看護、作業療法、社会福祉学科の学生が一同に会して、専門職役の学生が高齢者役の学生に課題を聞き取り、相互に専門性から対処方法と方向性を考えながら演技していくものである。7つのシチュエーションが設定されているが、そのうちの一つを選定し、実施する。この回は「お年寄りと一緒に施設退去について考えていく場面」を選択した。

オリエンテーション

最初に、前年度に実施された合同演習の際に記録として作成したDVDを視聴し、シチュエーションロールプレイとはどのように演技し展開されるものかについての全体像をつかむ。そしてテキストから今回使用するシチュエーションと対象者である高齢者Fさんの状況、背景、心境などを読み込む。次に各学科の教員による連携の意義と方法に関する講義を行う。各々の職種はどういう仕事を行うのか、どういう専門性を持っているのか、それをどのように他職種につなげていくのか、といった内容である。

基本演習①『高齢者への声かけ』

1グループは7～8名で、3学科の学生が揃うように分かれる。さらに各グループでは3学科3人の専門職役、1人の高齢者役、それ以外の学生は観察者役に分かれる。そして、家に戻りたい気持ちは強

いものの、戻った時のことを思い、不安をつのらせている高齢者Fさん役に専門職役の学生が声をかける場面を演じる。また観察者役の学生は、ロールプレイを見守りながら、その演技の評価を行う。さらにロールプレイは、役割を入れ替えながら3回（1演技3分程度）行う。そしてその都度、各グループで高齢者役と専門職役とのやり取りについて、フィードバックを行い、専門職役の「良い所」について話し合う。それらが終わると、指導者は学生全体からロールプレイについての感想や意見を出してもらい、それらにフィードバックを行い、一同で共有し、まとめる。さらに指導者は解説を行い、高齢者への声かけについてのポイントを整理する。

2回目のロールプレイを実施する。役割を入れ替えながら3回行い、その都度グループ内でフィードバックを行う。専門職役の「良い所」に加えて、1回目と比較しての「向上点」にも注目しながら、フィードバックする。そして指導者は全体的なフィードバックを行い、学生の意見や感想、教員のコメントを聴いて、セッションのまとめをおこなう。

基本演習②『他職種への情報伝達』

基本演習①で、高齢者Fさんから聞き取った内容を、他職種の人に伝えるという場面設定で行う。主役の専門職だけでなく、他職種を交えて、高齢者Fさんに関わる問題について、話し合い、対応を考えていく。さらに役割を入れ替えながら3回行う。そして主役の演技の「良い所」に注目しながら、フィードバックを行う。

最後に、学生同士が話し合いを行い、演習の振り返りを行う。

応用演習

高齢者への声かけ、情報収集から、他職種への情報伝達、対応の話し合いまでの一連のながれを行う。ロールプレイを2回行う（1演技7分程度）。その都度、フィードバックを行い、主役の演技の「良い所」を話し合う。グループ内のフィードバックの後には、指導者は全体でのフィードバックを行い、解説を行う。

まとめ

これまでの演習に参加して気づいたこと、学んだ

ことを基に、①「高齢者への対応で大切なことは何か」、②「各専門領域の専門性（得意分野・大事にしていること）は何か」、③「他職種と連携する時、どうすればうまくできるか。そのためには、どんなことが必要になるか」という3つのテーマについて、グループディスカッションを行う。そして最後に各グループで発表を行う。

対象および方法

2010年2月、当大学において3日間、1日2セッションの演習を実施した。学生は自由意志で参加したので、各セッションの人数は異なっており、最後のまとめのセッションでは40名（2年生32名、3年生8名）の参加が得られた。参加者は、作業療法学科9名、看護学科13名、社会福祉学科18名であった。また参加者には、前もって演習場面のビデオ撮影があることを説明し、同意が得られた場合には同意書を提出してもらった。

学生は、120分×6回のセッションの中から任意で3～6回に参加した。

そして最後のまとめのセッションでは6グループに分かれ、①高齢者への対応で気をつけること、②各専門領域の専門性は何か、③他職種との連携時に必要な事柄について議論した後に、グループのキーワードを添えて発表してもらった。ここではそれら各グループの発表内容の③を資料とした。教員2名（作業療法学科、社会福祉学科）と心理学修士取得者1名、社会福祉学専攻修士生1名の計4名でKJ法を参照し、まずデータの切片化を行ない、次に議論しながらグループ化を行い、各々にふさわしい名前を付した。そして最終的には他大学の心理学専門家の点検を受けた。

結果

学生に対して、「他職種と連携する時、どうすればうまくできるか。そのためには、どんなことが必要になるか」について各グループで話し合ってもらったところ、6グループから79のデータが出された。各グループのデータは7～17の幅があった。それらをKJ法によって、内容的に似たものをグループ

表1 学生の連携に関する認識

	カテゴリ	項目	データ数
1	利用者中心	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者を主体にする ・利用者が望むことを前提にする (2) ・ニーズに答える ・客観的から主観的まで ・いろんなパターンを考える 	6
2	カンファレンス	<ul style="list-style-type: none"> ・カンファレンスを開く ・意見を出し合う (3) ・情報を伝える (3) ・話合う場を作る (2) ・気軽に質問できる雰囲気 ・QOLをめざす ・分かりやすいように話す ・情報収集 ・皆の意見がよりよい援助になる ・自分の枠だけで捉えない ・具体的に自分の考えをまとめておく 	16
3	共通の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・共通の目標を持つ ・一つの目標に向かってアプローチが行えるようにする 	2
4	チームワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・チームワークが大切 ・チーム意識を持ち、高めていく ・チームで一貫性を持つ ・チームとして小さいことでも伝える ・チームでまとまる ・めんどくさいことほど一緒にやる ・点ではなく面での支援 ・お互いの理解度を知る 	8
5	情報	<ul style="list-style-type: none"> ・対象者の情報収集 (2) ・情報の整理 ・情報の提供 (2) ・情報交換 ・情報の共有 (3) ・情報の統一性 (2) ・補足部分を他職種に伝える 	12
6	伝え方	<ul style="list-style-type: none"> ・情報を整理して伝える ・細かく具体的に伝える ・正確な情報を伝える ・ほうれんそうを理解しておく 	4
7	信頼関係	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者との関係が大切 ・職種間関係が大切 ・信頼関係が大事 (2) ・あいさつが大切 (2) ・コミュニケーション能力が必要 	7
8	共通言語	<ul style="list-style-type: none"> ・共通言語で話す (2) ・専門用語を使わない ・分かりやすいように話す 	4
9	専門性の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・他職種の専門性を理解する (5) ・他職種の仕事内容の理解 ・自己の専門分野の理解 (3) ・自己のマンパワーやできる範囲の把握 ・職種によって見方が違う (3) ・各々の専門職の特性の理解 ・共通点と異なる点を理解する 	15
10	役割	<ul style="list-style-type: none"> ・お互いの役割を理解する (3) ・役割の明確化 (2) 	5

分けしたところ、10のカテゴリ(表1)が見出された。表に示された各項目の内容を見ると、学生が他職種と連携する時に必要だと考えるコミュニケーション方法、関係性、仕組み、専門性および役割等で構成されていた。また表に示された数値はカテゴリ別のデータ数である。

学生の連携に関する認識は、「利用者中心」(利用者を主体にする、利用者が望むことを前提にする等)、「カンファレンス」(意見を言い合う、話し合う場を作る等)、「共通の目標」(共通の目標を持つ、一つの目標に向かってアプローチが行えるようにする)、「チームワーク」(チームワークが大切、チーム意識を持ち、高めていく等)、「情報」(対象者の情報収集、情報交換等)、「伝え方」(情報を整理して伝える、細かく具体的に伝える等)、「信頼関係」(お互いの理解度を知る、高齢者との関係が大切等)、「共通言語」(共通言語で話す、専門用語を使わない等)、「専門性の理解」(他職種の専門性を理解する、自己の専門分野の理解等)、「役割」(お互いの役割を理解する、役割の明確化)から成り立っていた。

考 察

学生の連携に関する認識を、図1にまとめて示した。学生は「利用者中心」の認識が十分浸透してお

り、各職種は各々利用者の「情報」を収集し、整理している。そして「カンファレンス」では各職種の情報を報告し合う。そこでは「伝え方」に気を配り、情報を整理したり、具体的で、正確な情報を伝えるようにしている。また、意見を出し合い、話し合う場を設けている。さらに「カンファレンス」では、利用者のQOLをめざしており、「共通の目標」を掲げている。各職種は「共通言語」で話し、「信頼関係」に基づき、各職種の目標を掲げて、「チームワーク」している。他職種とチームワークするが故に、各職種の「専門性」が明確になり、「役割」が判明することになる。

吉田ら(2009)⁷⁾は、高齢者施設で働く職員を対象に、質問紙による自由記述で「連携の要領やコツ、工夫」を尋ね、その結果をKJ法によって分類している(表2)。それらからは、施設職員の連携に関する認識として8カテゴリが見いだされている。これら施設職員の連携に関する認識と、今回の結果を比較した。

学生と職員にみられ内容も共通するカテゴリとしては、「伝え方」と「利用者中心」があがった。「伝え方」とは、情報を整理し、ポイントを明確に伝えることである。また「利用者中心」とは、利用者主体の視線を持ち、複合的な対応を組み合わせ、利

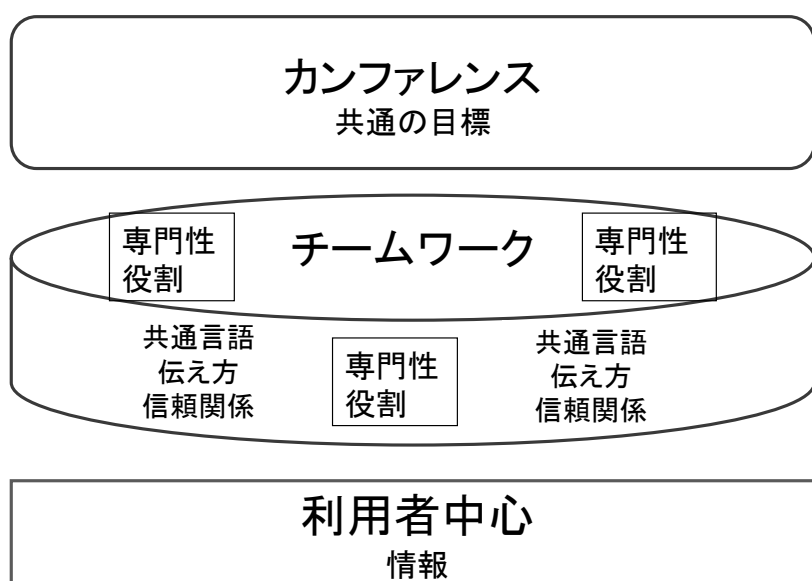


図1 連携の構造

表2 施設職員の連携に関する認識

	カテゴリ	中 項 目	データ数
1	基 本 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン	・日頃からコミュニケーションをとっておく	26
		・相手の話をよく聞く	20
		・専門用語ではなく、誰にでも理解しやすい、分かりやすい言葉で話す	19
		・はっきり、丁寧に（穏やかに）話す	6
		・話しやすい環境・雰囲気を作る	5
		・感情的な言葉で話さない、感情的にならない	4
		・「忙しいと思いますが・・・」などの一言を付ける	3
		・「ありがとう」感謝の気持ちを伝える	3
		・（声かけの）タイミングを見る	3
		・言葉づかい	3
		・笑顔	3
・あいさつ	3		
2	情 報	・情報を共有すること	11
		・報告・連絡・相談の徹底	8
		・気づいたこと、必要なことなどの情報を、他の職種の人に伝える	6
		・本人・家族の意向を確実に伝え、他職種に理解してもらう	5
		・何でも聞いてみる、分からないことは聞く	5
		・何事もきちんと報告をする	3
		・お互いの持つ情報をきちんと整理し、提供する	4
		・情報収集をしっかりとる	4
		・情報交換を密にする	4
3	伝 え 方 方 方	・相手が理解できたか、伝えたい内容が伝わっているかを確認する	7
		・目的・ポイントを明確に（はっきり）話す	6
		・具体的な事例・具体案を出して話をする	6
		・出来ることと出来なことを明確にする。理解する。	4
		・客観的に物事をとらえる	2
4	尊 重	・相手（お互い）を思いやる、認め合う	10
		・相手の立場・プライドを傷つけるような発言をしない。否定的な態度を取らない	10
		・一方的・上からの言い方・言葉づかいをしない。指示・命令型の言葉づかいをしない	10
		・相手の立場、状況を考える	9
		・相手の意見を聞いてから、自分の主張をする	8
		・相手を立てる（下手に出る）	7
		・「～いかがでしょうか？」と相談しながら話す。相談する形をとる	5
		・お互いに助け合う。「お互いさま」という意識を持つ	4
		・どの職種も上下関係ではなく、対等な関係である	6
		・各専門による違いを認める	5
・他職種の領域に土足で踏み込まない、自分の分野のことを押し付けない	4		
5	専 門 性 の 理 解 ・ 他 職 種 ・ 自 分	・各職種の業務内容を理解する	18
		・他職種の考え方・意見をしっかりと聞く	13
		・専門知識・専門性を尊重する	13
		・他職種の人と話す前に、自分で状況、状態、物事を理解し、まとめておく	6
		・専門職としての知識・技術を磨いて、意見が述べられるようにしておく	2
6	協 働	・実際に一緒に対応する、日頃から一緒に働く	9
		・他職種と話す機会・時間を設ける（研修会、勉強会など）	9
		・「一緒にしよう」「一緒に考える」という姿勢で関わる	4
		・協力を求められたら快く協力する	3
		・同じ目標を持ってサービスが提供できるように、意識を同じにする	2
7	人となりを知る	・仕事以外の会話で、その人の考え方や人となりを知る	3
8	利 用 者 中 心	・利用者（利用者の希望）を中心に考えて、お互いに発言したり動いたりする	17

用者が望むことを実現しようとするものである。

学生と職員にみられるが内容は異なるカテゴリとしては、「専門性」と「情報伝達」があがった。「専門性」では、学生は他領域の視点と比較して自領域の専門性を明確にすることに力点を置いているが、職員は他職種の考え方や意見を聞きながらそれらを総合して対応しようとすることに着目している。

また「情報」では、学生はどのような情報を他職種に伝えるか、他職種からどのように情報収集するか、という技能に注目しているが、職員は情報の伝え方は柔軟で、相手にその内容がうまく伝わったかどうかを重視し、それらを確認しながら伝達している。学生は情報伝達技能に注目しているが、職員は伝達内容の理解に着目しているといえる。

学生のみに見られたカテゴリとしては、「信頼関係」「カンファレンス」「共通の目標」「チームワーク」「共通言語」「役割」があがった。学生は連携を図る場合、全ての職種が集まり情報の集約・総合的な解釈・全体方針が出される場としてカンファレンスは欠かせない協働の場であると認識しているのではないかと考えられる。そこでは「共通言語」で話し、「共通の目標」を立案し、「チームワーク」すると想像していると思われる。さらに協働の場でこそ、各職種の「役割」が明確になると考えているのではないかと推測された。

職員のみに見られたカテゴリとしては、「コミュニケーション」「尊重」「人となり」「協働」があがった。職員間でのコミュニケーションでは、相手の話をよく聞いて、分かりやすい言葉で話すべきであると考え、さらに利用者や他職員のことを思いやり、尊重すべきだと考えている。また仕事以外の会話を通じて、他職種の人の「人となり」を知ろうとしている。さらに、他職種の人と実際上、一緒に対応し、日常的に話す機会を持つよう心がけているようだ。

以上からこの演習による効果と考えられることは、職員と共通して認識していた「利用者中心」の発想が第一前提として存在していることである。このことは授業中に学んでいたこともあるが、このロールプレイの場において学生が実際にやさしく問いかけ、高齢者の課題を見つけ、他職の学生にどの

ように行うかを定めるよう促すという一連の演技で示すことができたことは大きな成果ではないかと考えられる。また、情報の「伝え方」においても、情報を整理してポイントを明確に伝えるという意識を持つことは職員と共通しており、相手に上手く伝えようと努力する実演技によるよい効果といえるのではないかと考えられる。

また演習の限界については、学生は高齢者との対応やその年齢特有の意識の認識等が十分とはいえず、そのため高齢者をうまく演技することは難しいといえる。しばしば笑顔で、深刻な話題に取り組んでいる姿が見受けられたことから、高齢者の演技は教員または高齢の模擬患者に参加してもらえばより一層学びが深まるのではないかと考えられた。

Abstract

[Purpose] Cooperation among specialists is indispensable for total care of patients in the fields of medicine and welfare. A training program for cooperative working that consisted of lectures, cooperation skills training, and group discussions was conducted at University A that conducts training curriculums in occupational therapy, nursing, and social welfare. After completing the program, students' cognitions regarding cooperation was analyzed, differences between students' cognition and specialists' cognitions that have been investigated previously were examined. The effects and limits of this learning for students are discussed.

[Method] Participants: Participants were students of the three departments mentioned above (n=40). Procedures: After basic lectures on cooperation, role-playing of geriatric health care practice was conducted and discussions were carried out in six groups on "what is necessary for cooperation with other specialists?" [Analysis]: Analysis was conducted using the KJ method.

[Results]: Students' cognition included the following 10 categories: user-centered, discussion

opportunity, common goals, teamwork, information, ways of communication, relationships of mutual trust, common language, understanding of the specialty, and roles.

[Discussion]: Students recognized that cooperation could be achieved through discussions, setting common goals, and by understanding each role. However, in actual health care practice (Yoshida et al, 2009), there was a double communication structure, in which a simple message was delivered in public meetings and details were discussed in private conversations. Furthermore, when a goal was established for one specialty, it was shared by other specialties and roles were allotted flexibly, irrespective of specialties. Because of the above reasons, it is concluded that the program is useful for learning basic issues, but in actual practice, it is important to take measures that provide solutions for each unique circumstance. Therefore, it is necessary to further develop this program, so that it may be applied to specific practical situations by using the practical training more efficiently.

引用文献

- 1) 高橋榮明 (編) (2006) 特集, 新潟医療福祉大学における保健医療福祉専門職間連携教育の実践と将来 (2001-2006). 新潟医療福祉学会誌 6 (1) : 130-183
- 2) 朝日雅也, 大塚真理子 (2004) 埼玉県立大学におけるインタープロフェッショナル教育とカリキュラム改革. Quality Nursing 10 (11) : 13-24
- 3) 難波悦子・横山奈緒枝・細川つや子・田中共子 (2008) 対人関係形成能力の教育に関する現状と課題—A大学の看護師・作業療法士・社会福祉士養成課程における比較—. 日本保健医療行動科学学会年報 Vol.23 : 148-162
- 4) 細川つや子・横山奈緒枝・難波悦子 (2008) 大学における対人関係形成能力の教育に関する一

考察—看護師・作業療法士・社会福祉士養成課程の実習教育における共通課題—. 大学教育学会誌 第30巻第2号 (通巻第58号) : 159-163

- 5) 横山奈緒枝・田中共子 (2006) ソーシャルワーカーに必要なソーシャルスキル—研究の展望—. 吉備国際大学社会福祉学部紀要 第11号 : 55-65
- 6) 横山奈緒枝・田中共子 (2008) ソーシャルワーカーの対人援助技術—面接調査によるソーシャルスキルの整理を通して—. 吉備国際大学社会福祉学部紀要 第13号 : 35-42
- 7) 吉田薫, 横山奈緒枝, 田中共子, 難波悦子, 細川つや子 (2009) 老人保健施設における多職種間の連携スキルに関する探索的研究. 第24回保健医療行動科学学会学術大会.